

渋澤 健

ヘッジファンドを個人にも紹介 本来の姿を知ってほしい

明治時代に銀行や数々の企業を興し「日本資本主義の父」とも称された渋沢栄一の5代目にあたる渋澤健氏。かつてはヘッジファンドマネジャーとして活躍、現在は投資にかかわるコンサルタントとして個人投資家への啓蒙活動や社会的貢献にも力を入れる。ヘッジファンドやリスクマネジメントの本質とは何か、これからの日本で展開していきたいことは何か、聞いた。



■プロフィール

しぶさわ・けん '61年生まれ。渋沢栄一の5代目の子孫。小学校から米国で過ごし'83年テキサス大学卒業。'87年UCLA大学経営大学院卒業後、米系証券やヘッジファンド会社への勤務などを経て'01年現職。著書に「渋沢栄一とヘッジファンドにリスクマネジメントを学ぶ」「シブサワ・レター 日本再生への提言」。渋沢栄一記念財団理事。

URL
<http://www.shibusawa.or.jp>

— 以前は米系ヘッジファンド会社に勤めていた経験もある渋澤さんですが、今のお仕事はどう理解したらよいですか。

「言っていると、ヘッジファンドをはじめとするオルタナティブ(代替)投資に関するコンサルタントです。私自身が運用するのではなく、またファンドを販売するのでもありません。プロの投資家にファンドマネジャーを紹介するといったことです。最近では、プロ向けのヘッジファンドを個人に紹介するような仕事もしています。例えば昨年はマネックス証券で一般の個人投資家向けに本物のヘッジファンドを紹介しようというところで試験的なファンドを立ち上げました。私はその投資委員会のメンバーです。今までのように売りやすいから売る、売りたいから売る

といった方法はもう通じない。投資家に本当の理解を求めるための啓蒙役のようなことだと理解しています。3月12日には1000人規模の投資家向けセミナーを開きヘッジファンドやオルタナティブ投資とはどんなものか、運用の現場の方なども紹介しながら説明するつもりです。プロの世界だけに限られていたこうした運用手法を、個人の方にも知ってもらいたいです。

一般の個人投資家の間には、ヘッジファンドという何か怪しいもの、ハイリスクな運用商品といったイメージがまだあります。簡単にその本質を説明していただけますか。

そうしたイメージとはむしろ逆で、リスクを抑えてリターンを追求する商品。それが「ヘッジ」(回避)の意味です。もちろん過去に大きなヘッジファンドの破綻があったように、運用する以上はリスクがないということはありません。例えば98年に破綻した著名ファンド、ロングチーム・キャピタル・マネジメント(LTCM)の場合、過剰に借り入れを増やして収益を追求した結果、企業が過剰負債に陥ると同じような状態で破綻に追い込まれました。もう一つは詐欺のようなケースです。このため機関投資家や富裕投資家は、ゲートキーパー(門番)と呼ばれる案内役を頼りに、ヘッジファンドを選んできたのです。

理念、しがらみを捨てる… ファンドの本質は リスクマネジメント そのものに通じる



米国の代表的株式インデックスであるS&P500種と米回株式のロング・ショートタイプ(買いと売りのポジションを組み合わせて高い収益を追求するヘッジファンド)のファンド・オブ・ファンズのインデックスを比べてみてください。どちらも運用対象は米国の株式ですが、S&Pインデックスの方がはるかに上下の動きが激しい。リターンにしても、ファンド・オブ・ファンズの方が比較的着実に積み上げていきます。これこそがヘッジファンドの本来あるべき姿です。

インデックスに連動を目指す運用がパッシブ運用と呼ばれるのに対し、ヘッジファンドは積極的に収益機会を狙う超アクティブ運用です。インデックスやそれとの乖離なども気にせずに機動的に運用します。

——ヘッジファンドは必ずしも短期運用志向ということではない？

今ではこの世界の大神所となったジュリアン・ロバートソンといった人たちが駆け出しのころから、私の米国人ビジネスパートナーたちは25年や30年も自分たちファミリーのおカネをヘッジファンドに投資してきました。彼らのようにそうしたファンドに参加する機会があった投資家がいれば、莫大なりターンを得ているはずですよ。

また、ヘッジファンドの種類にもよりますが、運用するには適切な規

模というものがありません。普通はある一定以上になると、それ以上は受け入れられないということになってしまふ。頑固なラーメン屋のおやじみたいに、うちの運用哲学に賛同してくれればなら参加してくれ、イヤならいいよといったような……。

もちろん、この世界が広がるにつれて巨額の資金を受け入れるファンドも増えてきました。効率的に巨額の資金を集めるものと、あくまで運用収益を追求するものと、極化してきたといえるかもしれませんね。

——こういう商品に個人が投資するのは簡単ではないですね。

もちろん普通ならすごく難しいことですよ。プロでも優秀な目利き役を得て初めて投資できるような世界ですから。しかしだからこそ、本当のきちんとしたヘッジファンドを個人の方に広く知ってほしい。

何も特別なことばかりをやっているわけではない。ある意味では当たり前のことをやっているのです。自分なりにまとめてみると、ヘッジファンドにとって大事なことは①理念②しがらみを捨てる③守る④攻める⑤タイミングを図る——といったことになりました。

これはヘッジファンドであるかどうかにかかわらず、リスクマネジメントそのものです。日本の投資家はなかなかリスクを取れないとよくいわれますが、普通、日常生活でもり

スクマネジメントをしているもので
す。

——洪澤さんの場合には、ご先祖に当たる洪沢栄一さんの生き方からそういうことも学んだのですか。

後から学んでそうだったのか、と思うことも多かったのですが、例えば彼の人生を見ていると何度も命を落とすような目に遭っている。そのためにも国家、社会のために尽くすという理念は守りながら、しがらみは捨てるのですね。そして守ったり攻めたりしながらタイミングを見ている。まさしくスクマネジメントを実践した人だと思えます。もちろん運もありました。彼がフランスに留学した時期があったのですが、もし残っていたら徳川慶喜に近い者として命を奪われていたかもしれない。しかしその時々の人々の出会いや運を味方につけながら、結局は91年という長い生涯を、300社もの会社をつくり合うするわけです。運があるだけではなく、タイミングをきちんとつかまえるという点ではヘッジファンドでもビジネス、人生でも共通しているところがあります。

——そうした考えには、米国育ちということも影響していますか。

小学校2年生の時から大学まで米国で暮らしていました。大学卒業の時に日本に来て、3カ月くらいでし
ようか、実際に体験してみて日本も結構面白い所だなあと感じたので

社会的貢献を 一般的なものに。 おカネに対する 当事者意識が大事



す。結局、民間外交をする日本国際交流センターという財団法人でしばらく働くことになりましたが、そのころに比べると日本も変わりました。まず異分子を排除しようという雰囲気が大分なくなりました。当時は私のような帰国子女が日本の私企業に勤めるなどとても無理な雰囲気でしたが、3年前にたまたま知り合いから誘われて経済団体の経済同友会に入りました。「ちょっと場違いでは」と思いましたが、自分の発言や意見に色々と反応してくれる方が増えてきて、2年目には「世界における日本の使命を考える委員会」の副委員長も務めました。異分子的な意見を、積極的に取り入れたいということがあったと思います。

——今の日本で洪澤さんが力を入れていきたいことは何ですか。

一つは欧米の例にならってやってみたいことなんですが、欧米では社会経済的に成功した人は例外なく寄付活動に熱心です。もちろんそのための税制なども整備されているわけですが、日本は全然違う。

最近立ち上げたプロジェクトは、米国のヘッジファンドに運用してもらい、成功報酬の10%を社会的活動に還元するという仕組みです。ヘッジファンドはすぐに賛同してくれ、投資家も実際におカネを寄付する選定委員会に立ち会ってすごく関心を持ってくれる。税金だけではなく、個人の意思をおカネで表現する道が色々あっていいと思います。

日本でも最近ではSRI（社会的責任投資）が動き出していますが、広がりはまだまだでしょう。結局ひとりひとりの個人のおカネに対する当事者意識の問題だと思います。それを自分の問題として意識できるかどうかが重要だと思います。

●最近のウォール街ではエリートたちは投資銀行ではなくヘッジファンドを自指すといわれています。洪澤さんはその本質はリスクマネジメントにあると指摘します。そこには洪沢栄一にもつながる資本主義の原点が見えるような気がします。

(本誌編集長／藤森克己)